

生活の体系的理解を促すトピックの実証的分析

青木 幸子

(平成21年9月30日受理)

Verifiable Analysis of Topics as Teaching Materials for the Systematic Grasp of Living Space and Daily Life

AOKI, Sachiko

(Received on September 30, 2009)

キーワード：家庭科，カリキュラム構成，トピック，問題解決能力

Key words : Home Economics , Curriculum design, Topic, problem solving ability

1. はじめに

これまで家庭科のカリキュラム構成の新たな視点を得るために、トピック学習によるアプローチを検討し、その有効性について研究を進めてきた¹⁾。その結果、トピック学習の長所は、①学習者の興味・関心や日常生活に密着しており、主体的で柔軟な学習活動の組み立てを可能とする。それは②学習者による個性的な学びを促進し、実感を伴った分かり方をもたらし、意欲を喚起する。③学習活動は、学習者のトピックへの切り口により教室内から地域・社会へと多様性が想像され、認識の相対化が図られる。その一方で、そうしたトピック学習の醍醐味は短所にもなる。つまり、④学習者の事実認識や問題意識など個性的な切り口と多様な学習活動は、認識対象の範囲と水準に差をもたらす。それを最小限に抑え、一定の認識対象と水準を保って目標の到達へと導くためのカリキュラム構成が課題となる。そこで、学習者の発達段階によるトピック設定に差異はあっても、学校段階に応じて学習すべき教科内容の範囲と学問水準を確保するためのバックグラウンドを明らかにすることが求められる。そのような条件を満たすために、個人の生活欲求を実現する行為を構造的に分析し、個体や種の再生産など生活を維持発展させる行為を抽出し、それぞれを構造的側面と機能的側面とし、そのマトリクス上の様々な条件を解決することで生活を体系的にとらえようとする「生活構造論」にそのよりどころを求めた。日々の生活の営みにおいて生じる課題の解決（欲求の充足）を図るために、生活を総合的にとらえ（生活行為の側面を満たし）ながら、生活主体を育成することが可能ではないかと仮定した²⁾。

本稿では、この仮定に基づいて試みられた教員による開

発トピックの内容を分析し、先に得られたトピック学習の有効性に関する知見及び生活を総合的に理解するための仮説の有効性について検証することを目的とする。

2. 研究方法

(1) 対象

①平成21年度東京都教職員研修センターによる専門性向上研修「家庭Ⅲ」の受講者68名

②平成21年度教員免許更新講習の教科指導「家庭科」の受講者35名

(2) 方法

研修及び講習（以下、研修等と称す）において、グループごとに開発したトピック内容を仮説に基づいて分析し、生活を総合的にとらえることに資するトピックであるか否か、及び仮説の有効性を検証する。

(3) 期間

①平成21年8月3日～4日

②平成21年8月19日

3. 研修等の流れ

研修等は、トピック学習による題材開発をテーマとする理由、その意義と特徴、及びトピック開発の目的と手順について共通認識を図った後、トピック開発にチャレンジする展開とした。そのため、トピック開発の前段については、研修等のレジュメの主要項目を提示するに止める。

(1) 研修の要点

研修は2時間で計画され、午前・午後の2回に分けて実施された。レジュメの主要項目は次のとおりである。

午前中のテーマは、「生活の課題と実践に対する指導過程の理解」であり、今回の学習指導要領の改訂の背景と基

本的思考方（教育課程の基準の改善のねらい、家庭科改訂の基本方針、家庭科の学習内容とその特徴）、及び新学習指導要領に基づく家庭科学習指導のポイント（学習のねらい、学習方法の多様化、題材構成の方向性と学習方法の視点、OECD / PISA 学力調査の問題解決能力の問題例）で構成されている。

午後のテーマは、「生活を総合的にとらえる家庭科の題材構成」であり、トピック学習と家庭科（トピック学習、家庭科とトピック学習）、及びトピック学習の実際（題材開発が求められる背景、題材開発に向けて、トピック学習の実際、トピック題材開発例）より構成されている。

(2) 講習の要点

講習は3時間で計画され、内容は「Ⅰ. 家庭科の特徴を生かす学習指導の方法とトピック学習」と「Ⅱ. 家庭生活を総合的にとらえる題材開発とその検討」の二部構成である。

「Ⅰ. 家庭科の特徴を生かす学習指導の方法とトピック学習」では、題材開発の背景と学習指導要領の改訂の基本的考え方、家庭科改訂の基本方針、家庭科の学習内容とその特徴、家庭科の特徴を生かす学習指導—問題解決学習、題材構成の方向性と学習方法の視点、トピック学習、家庭科とトピック学習、トピック学習の実際を内容としている。

「Ⅱ. 家庭生活を総合的にとらえる題材開発とその検討」では、トピック題材開発例の趣旨を理解しながら、トピック開発に挑戦することを内容としている。

研修・講習ともレジユメの内容は、その目的により若干の相違はあるものの、要点に大きな差異はない。両方のレジユメに共通の「家庭科の学習内容とその特徴」において、筆者が提案した「学習内容の範囲」図と家庭科の学習内容の水準維持を保障するための「生活行為の要因」として、「状況」「社会」「文化」「物財」「パーソナリティ」の5つの要因を挙げている。

(3) 研修等の流れ

研修・講習とも、前半は講義、後半は演習としたが、トピック開発に時間を割くため、演習に関する講義内容は前半に繰り上げて実施した。演習は、学校種ごとに3~5名のグループを編成し、トピック開発に挑戦する時間とした。グループの構成メンバーによる日頃の学習指導における課題や悩みを出し合い、課題意識を共有してその解決のためのトピックを開発する。トピック題材の開発におけるプロセスはグループにより異なる。日頃の実践を踏まえた学習活動から題材を詰めていくグループ、現代の生活課題に真正面に向き合い、子どもが興味・関心を喚起しそうな題材開発を考えるグループ、また現代の生活課題と子どもの生活実態との乖離を埋める題材を模索するグループなど、帰納法と演繹法とが混在したアプローチが見られた。

トピック題材開発の概要がまとまったら、グループごとに発表用紙に記入し、用紙を黒板に貼付する。すべてのグループが貼付し終えたら、グループごとにトピック開発に至る経緯と開発の趣旨について発表する。

時間的制約からグループ間のディスカッションやトピックの系統性についての議論にまで至らなかったのは残念であった。

4. トピック題材の開発

各グループが開発したトピックを表1に示す。

トピック学習の醍醐味は、学習題材と学習者の距離が近いことが、両者の対話を促し、喚起された意欲が、認識の拡大につながることを期待させるところにある。学習者の学校知と生活知を背景にトピックに関する興味・関心に誘われ、個性的にアプローチをする。そのような意欲に溢れた学びを共有することで学習者の視野を広げ、アプローチと解決策の多様性を納得していく。日常生活における問題の解決は、生活場面におけるさまざまな問題と解決策との出会いと組み合わせの繰り返しではないだろうか。

佐藤学は、学びとは、〈世界づくり〉〈仲間づくり〉〈自分づくり〉の三位一体による『意味と関係の編み直し』の繰り返しであると定義している³⁾。題材だけで教育の良し悪しは決められないが、題材の親近性に加えて、どのような方法で、誰と学び合うかという変数によって、学びはさまざまな様相を呈する。題材と共に学び方も大切なのである。今回のグループによるトピック題材の開発は、学習活動を含む開発であり、そこからおおよその授業展開を想像することができる。

表中のトピックは題材や単元に相当し、サブ・トピックは小題材・小単元に相当する概念である。「生活行為の要因」を新たに設定したのは、トピック学習の長所である学習者の個性的な切り口からもたらされる学習課題の偏りに対して、それを修正し学校段階による学習内容の範囲とレベルを適正に保障するための解決策であり、既報の仮説⁴⁾に基づいた重要な要因である。「学習活動の種類」は、学習者主体の学びの重要性が指摘されていることを意識したものである。家庭科は、実践的・体験的な学習が強調されているにもかかわらず、その授業時数は減少の一途を辿っており、限られた時間数で学習者主体の学びをどう創りだすかは、学習活動に大きく関与するためである。

5. 開発題材の検討

研修等において開発された24のトピック題材について、まず特徴を概観し、生活を総合的にとらえるトピックある

生活の体系的理解を促すトピックの実証的分析

表1 開発トピック一覧

学校種	No.	トピック名	サブトピック名	学習活動例	学習活動の種類	生活行為の要因
小学校 5名	1	快適な衣服と住まい	夏の暮らしにチャレンジ	・涼しく住まうには…? 昔の暮らしを取材・リサーチ・実験 ・日々の暮らしの中で発見(衣食住)	取材、リサーチ、実験	状況、社会 文化、パーソナリティ
中学校 5名	2	住まいと着方	世界のいろいろな住まいと民族衣装	・自然環境との共生 世界のいろいろな住まい 世界の民族衣装 ・一枚の布から快適な着方を工夫しよう ・まとめ:自らの快適な住まい方と着方について考える	リサーチ リサーチ 実習 発表	状況、社会、文化 状況、社会、文化、 物財、自然環境 パーソナリティ
中学校 5名	3	環境に配慮した生活	エコ生活	・アクリルタワシ作り →汚れ調査(清掃)→発表 ・生活の中でのCO2削減	実習 調査、発表 調査	状況 物財 状況、社会、パーソナリティ
中学校 5名	4	バックトゥザフューチャー アワーライフ	家族の安全と室内環境の整え方	①住まいの安全と環境の点検→課題設定 ②課題解決のための手立て ③課題解決の具体的方法を考える ④生活を豊かにする布を用いた小物の製作 ⑤体験、実践報告を通して学びを共有化する	リサーチ、調査 実験、実習、調査 実習 生活への適応と共有化	状況 物財 パーソナリティ
高等学校 5名	5	効率を求めた生活を考える	自分でやるだけの価値がある?	・石けんでお風呂が洗えるか ・古着で作る掃除道具 ・野菜で楽しむ染色	調査、実験 実習、実験 実習	状況、物財 物財 文化、パーソナリティ
高等学校 5名	6	安全と環境	みんなで考えよう!ユニバーサル マーク	・身近な商品についているマークを調べ、 マークの種類や内容を理解させる ・グループに分かれて必要なマークを考え させる 誰のために、どうして必要なかを考える マークのデザインをする(色、大きさ、 キャッチコピーを考える)	リサーチ グループ学習、発表	文化 社会
高等学校 4名	7	木から考える日本文化	マイ 著	・箸を作る(杉の廃材) ・箸袋を作る(死蔵品のリフォーム) ・箸の素材(歴史、文化) ・日本の家屋(気候、構造) 箸から食文化、歴史、住居、環境、エコへの ダイアグラム	実習 実習 リサーチ、調査 調査、リサーチ	物財、文化、状況 物財、社会 パーソナリティ、文化 文化
特別支援学校 2名	8	卒後、通勤寮での自立に 向けた生活のために	・安くて栄養バランスのとれた外食 ・衣類の整理 ・エコ ・低予算での快適な寮(住)生活	・栄養学習 ・値段調べ ・試食 ・洗濯の仕方 ・衣服のたたみ方 ・収納の仕方 ・季節・環境に合わせた調整 ・エコバック製作 ・アクリルタワシ製作 ・ゴミの分別 ・家具の配置 ・フラワーアレンジメント	調査 実習 実習 見学	状況 物財 社会
小学校 5名	9		・寒い!!(夏なのに)	・衣服での温度調節 ・冷房などの温度調節 ・換気		
小学校 4名	10	快適な衣服の工夫	林間学校で気持ちよく過ごそう 金銭の使い方(お土産購入計画) 食事の見直し ご飯炊きの経験(協働) 整理整頓	・VTR視聴(日光での活動) ・気候などの比較 ・活動にあわせた衣服を考える TPOに合った衣服を考え、持参する ファッションショーをして衣服が相応しいか 考える 葉に着た服を書き、自己評価する 帰宅後、汚れた服の洗い方、かたづけ方を 考える いけない子への配慮(別の場面の設定)	リサーチ リサーチ 探究 実験	状況 パーソナリティ パーソナリティ
中学校 3名	11	エネルギーと資源	地球にやさしいひとと工夫	・エコバッグとレジ袋 利用率、どちらが良いか ・快適な生活を考える 快適な室温、湿度調べ 何を着用しているときが快適か 不用衣類からエコバッグ作り	リサーチ、アンケート 調査 アンケート 実習	

青木 幸子

中学校 4名	12	サザエさんの家をリフォームしよう ～ビフォー・アフター～	・サザエさんの家の間取りの比較 住まい方の違い(現代と昭和) 健康で快適な環境(設備) ・課題 家族構成(幼児、高齢者、障害者) 地震、エコ、近隣地域への配慮 ・問題解決方法 ・班でのまとめ発表	リサーチ 発表 講義 課題選択 話し合い 発表	状況 社会 物財 パーソナリティ 文化	
高等学校 5名	13	住居と住環境	暮らしの健康と安全	・防災MAPを作ろう ・防災袋を手作りしよう ・防災グッズを考えよう ・防災グッズを試してみよう	リサーチ 実習 調査 実験	状況、社会 物財
高等学校 4名	14	資源と私たちの生活	エコに関する意識	・エコバッグについて 大きさ 利用状況 所有数など	リサーチ	社会、状況
高等学校 3名	15	アレルギーと衣食住	アレルギーと衣服 アレルギーと食物 アレルギーと住居	・パッチテスト ・暮らしの中の化学物質を探そう ・アクセサリーの危険 ・食品添加物		
特別支援学校 4名	16	お掃除探検隊		①特別教室内の汚れを見つける ②汚れを落とすために必要な道具を選ぶ ③実際にきれいにする ④汚れない工夫について気づかせる ⑤環境問題(エコ)について考える	調査 実習(調査、リサーチ) 実習 リサーチ リサーチ	状況 状況(物財) 状況 パーソナリティ(社会) パーソナリティ(社会、文化)
小学校 3名	17	環境を考えた家庭生活 (5・6学年10時間)	料理って楽しいね!おいしいね!	・朝ご飯を作ろう(食べ物の旬) ・世界の朝ごはん ・調理用具を調べよう ・買い物の仕方(チラシの見方、品質表示、値段) ・リサイクル活動(資源回収、エコバッグ作成) ・ゴミの分別 ・献立作り(栄養バランス、地産地消)	リサーチ リサーチ リサーチ 調査、リサーチ 実習 実習 リサーチ、実習	状況、社会 状況、社会 文化 物財、文化、パーソナリティ 物財、文化、パーソナリティ 物財、文化、パーソナリティ 文化、状況
中学校 5名	18	食生活を自分の手で (70時間)	家族でホームパーティー	・家族の好みを知る(構成・栄養) ・献立作成(調理法、加工食品) ・予算(購入の仕方、支払い方) ・部屋の掃除と装飾(テーブルセッティング) ・購入(食材、価格、産地、表示、マーク、ゴミを出さない購入) ・調理(おいしく作る、安全、衛生、エコクッキング) ・ホームパーティー(マナー) ・片づけ(掃除、ゴミ)	リサーチ リサーチ 探究 実習 調査、リサーチ 実習 実習 実習、調査、リサーチ	状況、パーソナリティ 文化、物財 物財 状況、パーソナリティ、文化 物財、文化、社会 社会、状況、パーソナリティ、文化 社会、状況、パーソナリティ、文化 社会、状況、パーソナリティ、文化
中学校 5名	19	未来の私たちの生活 (2年生8時間)	こんな家に住みたい エコライフ	・夢の家を考えよう(家族構成、環境、生活様式) ・住宅展示場の見学 ・バリアフリー ・光熱費調べ ・エネルギーの活用(太陽光、自家発電、水の再利用) ・リサイクル(石けん作り、アクリルタワシ作り、 広告紙・牛乳パック利用) ・エコ・クッキング	リサーチ、見学 見学、調査 リサーチ、実習 調査 リサーチ、調査 実習 実習	社会、物財、文化 状況、社会 状況、社会、文化 社会 物財、パーソナリティ、社会 状況、社会 状況、パーソナリティ、文化
中学校 5名	20	消費生活と循環型社会 (6時間)	商品の選択と安全 かしこい消費者を目指して	・食品の種類 ・安全な食品 ・自分に似合う衣服 ・リサイクル ・手入れの仕方 ・環境を考えた処理	リサーチ 調査 実験 実習 見学	状況、社会 パーソナリティ 文化 物財
高等学校 5名	21	マドレーヌから見える 私たちの生活(35時間)	共に生きる	①マドレーヌの実習(栄養価、栄養素、材料、 自給率、フードマイレージ) ②容器・使用したエネルギー量を調べる ③食卓を整える(ランチョンマットの製作、照明、 テーブル、椅子を整える) ④マドレーヌ嗜好調査 家族の健康を意識したマドレーヌ(アレルギー、 ダイエットなど) 幼児～高齢者(身体状況に合わせた摂取量)	実習 調査、リサーチ 実習 調査、リサーチ	

生活の体系的理解を促すトピックの実証的分析

			⑤手作りマドレーヌと市販品との比較 手作りマドレーヌの原価計算 市販品を調べる(原価、材料、味、見た目、 食品添加物) 表示を見る(消費期限)	調査、リサーチ	
高等学校 4名	22 健康と環境	飲み物から見える健康とエコ (2時間)	①学校に持参する飲み物調査・分類 (水筒、缶、びん、ペットボトル、水道水を飲む) ②200ml分の栄養計算、糖度測定(予測させる) ③予想と結果の考察 ④価格調査と発表 ⑤上記②～④のゴミ処理法 ⑥健康、環境面から見た考察	調査 実験 リサーチ 討論 リサーチ リサーチ	状況、物財 状況 パーソナリティ 社会 社会、文化 パーソナリティ
高等学校 4名	23 暮らしをつくる (6時間)	私達の食生活と健康を考える 効率的な生活に即した手作り料理 環境に配慮した食生活を考える	・食生活の現状を知る ・食生活を考える(食品の構成、手作りか否か) ・環境に配慮した計画(買い物、料理、片付け) ・調理をする ・調理実習を踏まえて、生活の仕方を改め、実践 する	調査 調査 リサーチ 実習	状況 状況、文化 物財、パーソナリティ、文化
高等学校 4名	24 生活をつくる	暮らしの健康と安心	・いろいろなおにぎりを味わう ・市販品と手作りの比較(価格、材料、味、添加物) ・地産地消(地域の高齢者との交流) ・消費者としての視点	実習、実験	

いはサブ・トピックとして典型的な例を取り上げて検討する。ここでの要点は、①トピック学習の意義を理解しているか、②学習者主体の学習活動に配慮されているか、③生活行為の要因を満たしているか、の3点とする。

(1) トピック題材の特徴

24の開発されたトピック題材は特徴により3つに類別することができる。

一つは、同じ分野の内容を多角的な視点でとらえ、題材を再構成した事例である。これは我が国の教科指導において、教科書は学問分野を尊重した縦割りの内容編成となっており、分野ごとの指導が系統的に行われるのが通例となっていることからの脱皮を試みたものである。縦割り専門分野の指導に慣れた教員にとって、分野を横断して題材を再構成することは容易なことではない。しかも短時間の中でトピック学習を理解し、題材開発を行うという制約があるのであるから。ここに分類される事例は、トピック題材の開発としてより、分野ごとの題材開発としての意義を見出す方が適切であるかもしれない。

二つは、異なる分野を横断して題材開発した事例であり、トピック学習の長所を理解しての開発である。トピック名とサブ・トピック名が提案されている事例の場合、まだサブ・トピック開発の余地があると考えられる。つまり、トピック開発としては完結していないと考えるべきである。これに類別できる事例は、No.1, 2, 4, 11, 12, 17, 19, 20である。

三つは、教科内容の分野にかかわらず、新たな視点で生活を総合的にとらえるトピック開発を試みた事例であり、開発トピックのNo.6, 7, 15, 21が該当する。

本稿では研究の分析上、トピックの特徴を3つに分けて類別したが、短時間での開発結果について安易な結論を下

すべきではなく、この経験が、後のトピック開発に繋がることを望んでいる。

分析対象として、二つ目に該当するトピック例のNo.17と、三つ目に該当するトピック例のNo.6, 7, 15, 21を取り上げ、検討する。

(2) トピックNo.17：小学校「環境を考えた家庭生活」

この事例は、5・6学年を通して10単位時間での題材計画である。この計画は、新小学校学習指導要領では、「B 日常の食事と調理の基礎」の内容を多く含むつつも、「D 身近な消費生活と環境」の(1)物や金銭の使い方と買物、(2)環境に配慮した生活の工夫、も取り込んで立案されており、トピック開発の趣旨と学習指導要領の「内容の取扱い」を理解して開発されたことが分かる。もともと日本の教科書は分野の系統性を重んじて編集され、授業内容も分野ごとに行なわれてきたことは先述したとおりである。

しかし、小学校の生活科、及びその後の小・中・高等学校への総合的な学習の時間の新設に及んで、カリキュラム編成に相関型や融合型など新たな視点を取り入れられることになった。知識基盤社会においてますます横断的、総合的、複眼的なものの見方・考え方が要請され、だからこそ新学習指導要領で活用する力の育成が謳われているのであり、カリキュラムの融合化は促進されるように思われる。トピック学習もこのような融合化の一つの方法である。

「学習活動例」で分かるように、朝食の重要性を小学生から気づかせ、習慣化させたいという意図が伺える。この学習活動例だけで、学習指導要領の目標が達成できるかどうかは定かではない。なぜなら、他の題材計画を考慮することなしには断定できないからである。朝食作りを通して、栄養素、食物の旬、買物を通して消費者意識を高め、調理用具の使い方を理解し、ゴミの分別やエコバッグ作りを通

して環境に配慮した生活の工夫をさせる構成となっている。

「生活行為の要因」は、先に挙げた5つをすべて網羅している。

(3) トピックNo.6：高等学校「安全と環境」

この事例は、「みんなで考えよう！ユニバーサルマーク」のサブ・トピック名から分かるように、マークを切り口に生活を総合的にとらえようとするものである。

「学習活動例」には、「身近な商品についているマークを調べ」ることで、いわゆる衣食住など生活のあらゆる側面に関するマークを調べ、その意味や用途を理解する。それを踏まえて、「誰のために、どうして必要か」、見にくい、分かりにくいマークに対するデザインを考えることで、消費者の立場から行政に対する意見を発信していくことのできる主体性を養うことが期待される。主体的な生活者を育成することは家庭科のねらいである。

「学習活動の種類」は、リサーチと発表であり、マークの必要性に関しては仲間との学びあいを取り入れている。ここでの学習を基盤として生活全般に関するマークのあり方について発信していく力を育てたい。

「生活行為の要因」には、文化と社会の二つしか挙げられていないが、筆者の判断では、マーク調べには文化と状況、物財が当てはまり、マークの必要性には社会とパーソナリティも該当する。

このトピックについては、マーク以外の切り口により新たなサブ・トピックの設定が期待される。また、学校段階を超えて取り組めるサブ・トピックであり、学習者の系統的な認識の拡大が期待でき、トピック開発の可能性を感じさせる。

(4) トピックNo.15：高等学校「アレルギーと衣食住」

この事例は、先の(3)トピックNo.6「安全と環境」との関係を連想させる事例である。つまり、(3)において指摘した異なる切り口からのサブ・トピックに本事例が該当するのではないかと考えられる。つまり、「アレルギー」という視点からの切り口である。

近年、衣料用新素材による皮膚アレルギーや住宅用新建材が原因とされるシック症候群、あるいは卵、小麦粉、青魚など食品によるアレルギーが多く報告されるようになってきた。それらの内容を縦割りの専門分野ごとに指導するのではなく、生活の中のアレルギーということで一括して取り上げることで、生活を総合的にとらえる視点とアレルギーについて幅広く理解することが出来る。

例えば「洗剤」といったら何をイメージするだろうか。分野を横断した題材開発の中で多くの大学生がイメージしたのは「洗濯洗剤」であった⁵⁾。これは縦割り専門分野での指導の結果でもある。洗剤には、洗濯用のほか、食器用、住宅用（レンジ、家具、壁、床、畳、トイレ、浴室、ガラス、家電製品等）や屋外用（外壁、門、玄関タイル等）な

ど多くの種類がある。

生活は分野に分かれて営んでいるわけではない。生活全体を丸ごととらえる視点は日常生活において必要な視点である。一つひとつの行為が異なる分野と関連しているのである。食生活を扱う際に、栄養と食品と調理の学習だけで事足りると考えるのは誤りである。そこには、家族があり、家計が絡み、消費が及ぼす環境への影響を考えた生活の仕方に配慮が求められる。食生活は複合分野の上に成り立っているのである。生活をトータルに見る、横断して見るというのは、これらの関係をよく理解し把握しながら、生活を営むことを意味する。したがって、アレルギーから生活を見直すことは、有益な視点であると考えられる。

「学習活動例」や「サブ・トピック名」から分かるように、アレルギーという視点から衣食住をとらえる内容になっている。このような状況から、「安全と環境」のサブ・トピックとして、アレルギーと衣食住を設定することが有益だと考えられる。

この事例については、「学習活動の種類」「生活行為の要因」についてまで検討するに至らなかったようであるが、学習活動例から要因としては状況、物財、文化、パーソナリティとの関連は推察することができそうである。

(5) トピックNo.7：高等学校「木から考える日本文化」

この事例は、日本の文化に照準に当てて、生活を総合的にとらえようとした試みである。家庭科は、1947年の新設当初から、家庭生活を認識対象に、生活の営みを大切に思想と自立した生活者を育て、生活文化を創造することをねらいとしてきた。経済状況や世界の中に占める日本の位置、そして消費者問題や環境問題が大きくクローズアップされるにつれて、自立の意味が問い直され、近年は「自律」がコモンセンスを得ようとしている。一つひとつの生活行為は、我が家の改善・向上から地域社会や世界のあり方を見据え、人や環境との共生を図る視点を併せ持つ個人の価値観に基づく行動へとその重要性が高まっている。これは世界的傾向であり、グリーンコンシューマーはその代表的な例である。

この事例は、日本の食文化である「箸」を切り口に、多様な学習活動を展開し、日本文化への再確認を意図している。「学習活動例」も「箸を作る」ことでその素材に着目させ、日本の食文化の歴史的理解へ誘い、同時に日本の林業へと認識の枠組みの幅を広げている。また、「箸袋を作る」ことで、死蔵衣服の再利用への窓口を開き、被服分野での学習との関連を図っている。さらに、木の文化を代表する日本の家屋の特徴を気候や歴史と関連づけて考えさせ、それらを通して衣食住にかかわる環境に配慮した生活について認識させ、日本文化とかかわらせながら生活を創造していく価値観と態度の育成をねらっているように推測される。他教科で学習した内容、家庭科の他分野で学習した内

容へと学校知の振り返りと箸という生活知をめぐる経験とが交差するように学習活動が組み立てられていることも、このトピック題材の内容の豊かさを感じさせる。

家庭科の学習において大切なのは、学校で学習したさまざまな物の見方、考え方をそのまま鵜呑みにするのではなく、自分の生活というフィルターを通して事実確認をし、価値判断をし、行動化に繋がる自己内対話ができるかどうかである。

学習活動例からトピックとサブ・トピックを見直すならば、サブ・トピックとして「マイ箸」の他、「日本の家屋」「木と調度品」「木と民芸品・工芸品」などのサブ・トピックも考えられる。サブ・トピックを分けることで、学習者の興味・関心の幅を広げることができる。今回は教員が設定しているが、本来は子どもが設定するものである。

学校段階によって学習者の認識の枠組みも異なるわけで、その意味からもこのトピック題材は、学校段階によって異なるサブ・トピックや学習活動を自在に設定することが可能であり、トピック題材としての開発の可能性が大である。

「学習活動の種類」は実習、リサーチ、調査が組み合わせられており、学習者主体の活動が配慮されている。ここでは具体的な授業展開までは求めていないが、〈仲間づくり〉ができるような学習展開を調整する必要がある。

「生活行為の要因」は、5つの要因を満たしているが、パーソナリティのウエイトを高めたい事例でもある。

(6) トピックNo.21：高等学校「マドレーヌから見える私たちの生活」

この事例は、マドレーヌから私たちの生活をとらえなおすことを意図したもので、それは35時間という時間配分からも分かる。

「①マドレーヌの実習」と「⑤手作りマドレーヌと市販品との比較」では食生活と消費・環境分野、「②容器・使用したエネルギーを調べる」では消費・環境分野、「③食卓を整える」では衣生活と住生活分野、「④マドレーヌ嗜好調査」では家族・高齢者と食生活分野というように学習活動における切り口も分野を横断している。このグループは、徹底してトピック学習の長所を生かすべく題材開発に取り組んだ。時間いっぱい意見交換をし、知恵を出し合っていた。

提案された学習活動は、実習、調査、リサーチが挙げられており、生徒が主体的に学習に取り組む活動が提案されている。しかし、生徒間で学びあう機会を持つことのできる学習活動を設定することで、佐藤のいう〈世界づくり〉にあたる認識の広がりを促すことができると考えられる。教員対生徒のコミュニケーションと同様に生徒同士のコミュニケーションも同時に保障することで、同年代の学びに大きな刺激となるであろう。

題材構成に時間を多く費やしたため、作業時間の制約か

ら「生活行為の要因」を書き出すことができなかったようである。学習活動例や種類から筆者が推測するに、①には状況、物財、社会、文化、②には状況、③には文化、物財、④には状況、文化、パーソナリティ、⑤には状況、物財、文化、パーソナリティなどが挙げられ、すべての要因が網羅されている。

5. おわりに

今回の学習指導要領の改訂においては、「生きる力」という理念を継承しながらも、PISAを始めとした学力調査の結果を踏まえて、新たに「活用する力」の育成を強調している。活用する力とは、具体的には思考力であり、判断力であり、表現力であり、その基礎となる読解力を含んだ概念として理解されている⁶⁾。

家庭科は問題解決学習を教科指導の方法論として採用し、主体的な生活者として、生活問題を解決し、生活の改善向上を図っていく力を養う過程において、この活用する力の育成を図っていかなければならない。今まで以上にである。

家庭生活を営むとは、実は活用する力なくして不可能である。一つひとつの生活行為は、不断の意思決定の連続だからである。活用する力の育成には、学習者を主体とした学び、つまり能動的な学びを創り出す必要がある。能動的な学びには時間が必要である。しかし、家庭科の場合は、授業時間数が減少傾向にある。そのような課題に対する解決策として提案したトピック学習の効果について、現職教員が開発したトピック題材で検証した。

仮定どおり、トピック学習は学習者主体の学びを創出し、生活を総合的にとらえることを期待させることが分かった。しかし、縦割り専門分野の指導に慣れている教員の一部には、その習性から脱し切れずにいる。

このたび開発されたトピックの中には直ぐ授業に生かせるものが多くあるが、このトピックをより効果的に実施するためには、他の題材との整合を図る必要があり、年間指導計画で題材の配列と系統性・関連性には十分な配慮が必要である。

新学習指導要領では、特に中学校において、「生活の課題と実践」が各分野に設けられ、分野ごとの課題設定と実践による解決の計画を立案することが謳われている。トピック学習は、この分野ごとの課題と実践に対する題材構成にも適用できる。さらに、分野にこだわらない生活全体についての題材設定と実践を計画することもでき、学習指導要領の主旨より教科内容の横断性と総合性が強いものであるといえる。

授業時間数が減少傾向にあるなかで、学習者の認知の枠組みを広げ、問題に適切に対処し、その解決を目指した実行力を育成するため内容構成を実のあるものとする必要が

ある。問題発見から解決へ、そして実生活への適応に至る継続性のある学びを創り出していくことが重要なのである。

このような開発を蓄積していくことで、小・中・高等学校の系統性のあるトピック題材を提案していきたいと考える。

注

- 1) 青木幸子：家庭科における「知」の再構成と学びの転換，東京家政大学博物館紀要第9集，2004，p.1-15
青木幸子：「経験」をリードする家庭科の内容編成試案—トピックによる内容構成の試み—，東京家政大学博物館紀要第10集，2005，p.1-14
青木幸子．英国における家庭科の学習目標とトピック学習の関係，東京家政大学研究紀要第46集（1），

2006，p.43-54

- 2) 青木幸子：トピックの認知対象よりみた家庭科カリキュラム構成案の検討—生活空間と生活の営みの視点から—，東京家政大学博物館紀要第13集，2008，p.1-19
- 3) 佐藤学．「学び」から逃走する子どもたち．岩波ブックレットNo.524，東京，岩波書店，2002，p.56-57
- 4) 2) p.16-19
- 5) 青木幸子：家庭科のカリキュラム構成とトピック学習，日本家庭科教育学会誌 第51巻3号，東京，2008，p.159-169
- 6) すでに発行されている「小学校学習指導要領解説 家庭編」「中学校学習指導要領解説 家庭編」の「第1章総説 1改訂の経緯」に記述がある．
安彦忠彦編：平成20年版中学校新教育課程 教科・領域の改訂解説，明治図書，2008，p.34-35

Summary

I have investigated the topic study as a new viewpoint to construct the curriculum of Home Economics and have proposed a viewpoint for the content formation based on the “theory of structure of life” in order to understand the life systematically.

In this paper I have tried to analyze the teaching materials of topics developed by incumbent teachers from the point of view of the effects of topic study and the systematic grasp of living space and daily life.

As a result, the followings are made clear:

1. As a result of the analysis of 24 cases I could classify the teaching materials of topic into three:
 - ① 12 cases of topics which were developed through the reconstruction of the contents of the same field.
 - ② 8 cases of topics which were developed through the crossing of more than two different fields.
 - ③ 4 cases of topics which were developed through the comprehensive grasp of living space and daily life.
2. Topics were developed for the purpose of promoting the students' ability to create independent learning and to systematically grasp living space and daily life.
3. The analysis has verified that the clearness of the viewpoint of the comprehensive grasp of living space and daily life is useful for topic development.

要旨

家庭科のカリキュラム構成のための新たな視点としてトピック学習について検討し、生活を体系的に理解するため「生活構造論」にもとづく内容編成の視点を提案してきた。

本稿では、現職教員により開発されたトピック題材について、トピック学習の効果と生活の体系的理解の視点から分析を試みた。その結果、次のことが明らかになった。

1. 24の事例を分析した結果、その特徴によってトピック題材を3つに分類することができた。
同じ分野の内容を再構成して開発されたトピックが12例、異なる2つ以上の分野を横断して開発されたトピックが8例、新たな視点で生活を総合的にとらえて開発されたトピックが4例であった。
2. トピックは、学習者主体の学びを創出することができ、生活を体系的にとらえる意図をもって開発された。
3. 生活を総合的に捉える視点が明確であることが、トピック開発に有益であることを確認することができた。